

## 2025年3月ハイパーカレンダーレポート

春の訪れとともに、[ICT教育サポーター育成プラットフォーム](#)は、3年目の活動が終了しようとしている。振り返れば、サポーターたちの努力と挑戦の月日だった。その集大成として、3月21日に行われた対面の研修会では、「生成AIを活用した教材開発ハッカソン」を実施したのだが、わずか30分という制限時間の中で、各チームが見事に教材を形にしてみせた。そしてサポーターたちには、この3年間で培った知識と熱意が表れていた。卒業や就職という人生の節目に立つ仲間も多く、別れの寂しさを越えて、互いの未来にエールを送り合う様子は、「志をつなぐ」大切な時間であった。

このプロジェクトは、大分県教育委員会からの委託のもと、[GIGAスクール構想](#)の実現を目指して始まった。1人1台端末時代を支える「GIGAヘルプデスク」の設置、そして「ICT教育サポーター」の育成と派遣。その中心には、教育現場を支えたいという真っ直ぐな想いがあった。2022年春、約40名のメンバーが集い、田中康平氏(Nel&M)を講師に迎えた実践的な研修が始まった。教育基本法の理念から、現場でのトラブル対応まで、彼らは教育の最前線に立つ覚悟を持って取り組んだ。だが、現実とは理想とは違っていた。サポーターが「雑用係」のように見なされる場面もあり、理念と実態のギャップに戸惑う日々。しかし、私たちは諦めず、学校を訪ね、話し合いを重ね、信頼を一つずつ積み上げていった。同時に先生たちが多忙ゆえに疲弊している現場の現実も受けとめていった。そして、サポーター自身も成長を重ね、現場で笑顔が生まれるようになった。3年間のアンケートで9割を超える「効果あり」という評価は、数字以上の意味を持っている。それは「信頼された証」である。それでもなお、全てが順風満帆だったわけではなく、今でも連携が難しい学校もある。情報化推進チームの形成や管理職の巻き込みといった課題が残っている。だからこそ、私たちは次の一步を踏み出す。

2025年度から、この事業は「教育DX推進プラットフォーム」へと名称を変える。それは単なる名前の変更ではなく、「教育支援の進化」を意味する新たな宣言だ。同時に大分県教育委員会が策定・公開した[「教育DX推進プラン2025」](#)には、「変化の激しい社会において、デジタル技術を適切かつ主体的に活用し、多様な可能性を切り拓く子どもたちの育成」という目的が掲げられている。私たちの活動も、その大きな潮流の一翼を担う存在となる。

次の3年間にICT教育サポーターが担うのは、もはや補助ではない。子どもたちの未来をつくる現場に、共に立ち会う「未来の共創者」と考える。新しい技術は、次々に生まれ、時代は容赦なく変わっていく。しかし、私たちは流されず「不易と流行」を大事にしながら、「がんばる学校を、全力で応援するプラットフォーム」として、さらに取り組み進めていく。



イメージ図(生成 AI で作成)

(文責:渡辺律子)